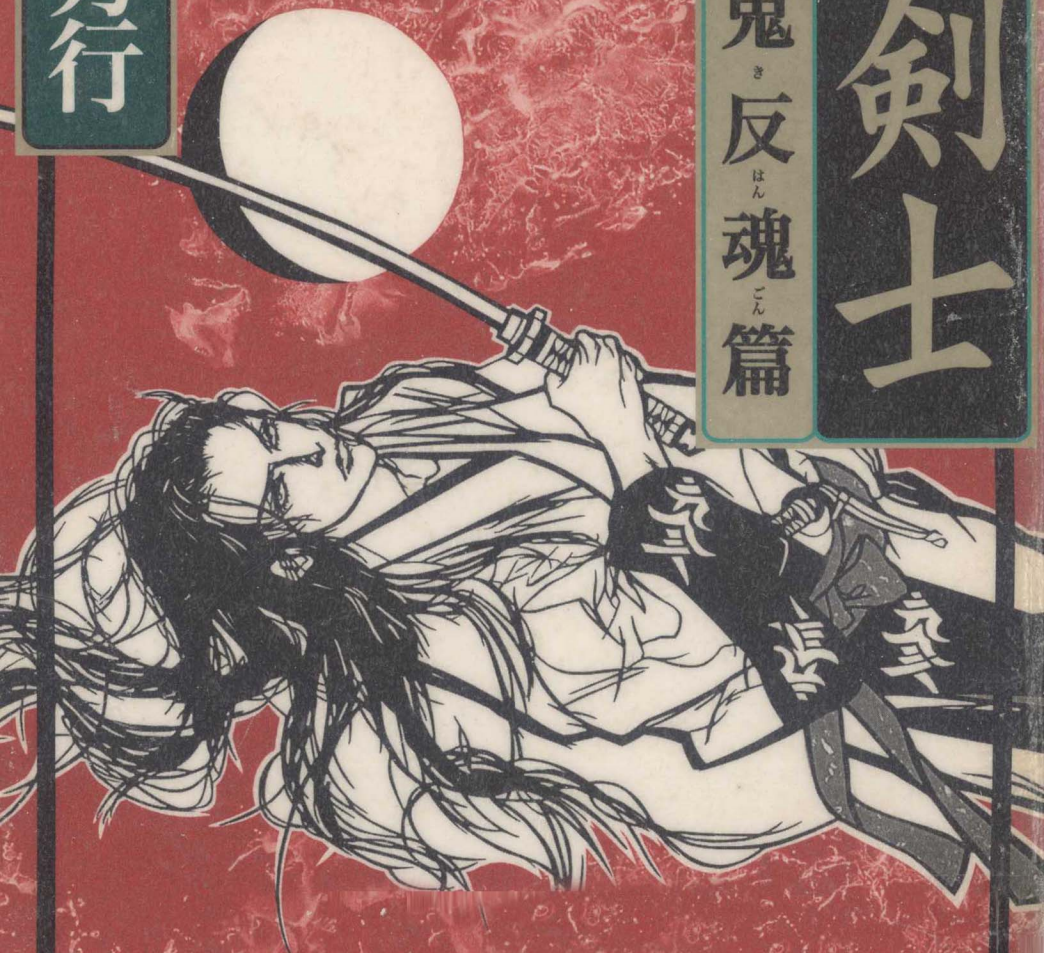


魔劍士

黒こ鬼き反はん魂こん篇

菊地秀行



新潮社



菊地秀行

魔劍士

黒

鬼

反

魂

篇

新潮社



まけんし こつきはんどんへん
魔剣士 黒鬼反魂篇

著者／菊地秀行 (きくち ひでゆき)

発行／1998年2月20日

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162-8711／東京都新宿区矢来町71／振替00140-5-808

電話：編集部 03(3266)5411・読者係 03(3266)5111

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／加藤製本株式会社

© Hideyuki Kikuchi 1998, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-421901-0 C0093

魔劍士 目次

第一章 誕生朱記

第二章 眠り人

第三章 闇人縁起

第四章 西行法師の遺産

第五章 京の魔人たち

第六章 死生を弄ぶもの

第七章 妖しの譜

151

127

102

78

55

30

7

第八章 忍者二種

175

第九章 天下人との遭遇

200

第十章 生誕の地へ

222

第十一章 不死を呼ぶ不死

248

第十二章 茫乎として

271

あとがき

296

装画・挿画◆伊丹シナ子
装幀◆新潮社装幀室

魔劍士 黒鬼反魂篇

第一章 誕生朱記

1

その夜、明智光秀の耳には、ひとつの言葉だけが繰り返し鳴っていた。

「信長殿を討ち取つたり」

誰の叫びかはわからない。重臣荒木山城守あらいまきのかみの声かとも思ったが、雑兵ざろひょうの誰かといわれても、うなずかざるを得ない。後者であろう。

本能寺は京の朝を魔天の業火ごうかのごとく染めて崩れた。半刻はんしゆくほど前のことである。紅蓮べんれんの炎の中に主人・信長が消えたことも、兵の知らせで確認済みである。首級しるしは挙げられなかったが、これはいたし方あるまい。

「信長殿を討ち取つたり」

頭蓋内に響き渡る声を、光秀はついに口に出した。

いま、彼は二条御所の門の外にいた。

十重とえ二十重たえに館を取り囲む武者たちは、すべて彼の部下——裏切り者の軍勢である。

この日、天正十（一五八二）年六月二日、織田信長は本能寺に滅んだが、同時に長男・信忠も

討たれた。彼は当初、妙覚寺に投宿していたが、京都所司代・村井貞勝の連絡によつて異変を知り、五百の手勢を連れて二条の御所に入ったのである。

やがて、待ち受ける光秀のもとへ、

「信忠殿も自刃なさいました」

嬉々たる報が入った。

信忠は霸王と呼ばれた父に劣らぬ奮戦ぶりを見せたが、ついに腹を切つたという。介錯役は鎌田新介であつた。

光秀の名を永遠に歴史に刻む仕事は、これで終わつた。

——終わつた。

当人もそう思つた。考えねばならぬ事柄は、実は山積している。何よりも、あの猿面——羽柴筑前と徳川家康の姿が、心の臓に腫物のごとく芽吹いていたが、羽柴は中国で毛利輝元相手に苦戦を重ね、家康は弑したばかりの信長に招かれ、堺に滞在中だ。こちらの態勢が整う前に攻撃を仕掛けられる怖れはまずない。

他の武将——信長麾下の猛将・柴田勝家は魚津で上杉景勝と戦闘中だし、丹羽長秀は、信長の三男・信孝とともに四国攻めに日を送っている最中だ。滝川一益ときたら、上州厩橋に着いたばかりで、新領土の統治計画に余念があるまい。

時間はある。この国を己が腕で統治するための時間が。

光秀はそう確信した。信じようとした。常日頃の彼なら、その聡明さが、自らの実力と未来とをはかりにかけ、暗澹たる思いを抱かせたにちがいない。だが、すでに彼は手を染めてしまった。そもそも、主君たる信長を弑するなどという大逆行為自体が、光秀向きではなかつたのだ。

それなのに、いま、信長は紅蓮の炎の中に消え、光秀の耳の中には、討ち取つたりの叫びが銅鑼のごとく鳴り響いている。

ふと、言いようのない不安が兆した。

——おれは、なぜ、こんな大それた真似を。

彼らしいこの思いを忘却させたのが、自らの精神の動きか、それとも、そのときもたらされた一報によるものかはわからない。

「生き残りを召し連れましました」

本能寺での信長の近習たちは、全員、討ち死にしたが、信忠の部下には降伏者が出た。彼らを殺そう、とは光秀は考えなかった。

勘解由小路にある二条の御所は、もともと正親町天皇の皇太子誠仁親王の御所であり、光秀軍に包囲された信忠は、親王とその皇子、従者たちを退去させて欲しいと申し出、光秀も快諾していたのである。これ以上の殺戮は、本来の彼の望むところではなかった。

面前に引き据えられた捕虜たちの数が少ないことも、慈悲心をあおった。

どれも小兵たちである。光秀の顔を仰ぐこともできずに、面を伏せている。

「いかがなさいます？」

と齋藤利三が訊いた。光秀の腹心である。右の頬が裂けているが、出血は止めたらしい。

「去かせてやれ」

もう一度、平伏した敗北者たちを見廻し、光秀は低く命じた。

「お？」

と洩らしたのはそのときだ。

陣屋はつくつていない。路上である。朝の陽光は、水のように世界を光らせている。そいつは、闇の放った刺客のように見えた。

ひとたび光域の外に出たら、闇に溶けこんで、天神の眼にも止まるまい。全身黒ずくめ——否、皮膚そのものが真つ黒な男であった。

異様な感覚が光秀の——大反逆者の胸を風刃のごとく切り裂いた。

ほとんど怯えに近いそれを必死でこらえつつ、

「顔を上げい」

と命じた。

ぬう、と黒い顔が上がった。楯円の闇が生じ、その上部から、黒い双眸が光秀を見上げた。

その眼だけが、この黒い生きものに対して抱けた親近感の素だったことを光秀は憶い出し、この国の言葉を知らぬはずなのに、彼らの言葉に従った事実を忘れた。

家臣一同もそうだったらしい。いや、一、二名の重臣を除いて、このような存在を眼にするのははじめての者ばかりであったから、言葉などという些細な問題など、そこに踞った姿を一瞥しただけで、霧消してしまつたのである。

「その者は——」

と斎藤利三が言いかけたのは、そいつの素姓を説明しようとしたのか、それとも、光秀に尋ねたものか。

「存じておる。信長公——信長が、ヴァリニャーノと申す宣教師から貰い受けた者じゃ。肌の色こそ見ての通りだが、人間だと宣教師どもは言っておつた」

「それは——」

と利三は絶句し、動揺と笑いが一座を伝わった。どんな心情を反映したのか、誰にもわからなかつたにちがいない。

黒い生きものは、縮れ毛の下の眼を、むしろ、生き生きと光らせながら、光秀を見つめていた。光秀が口にしたヴァリニャーノとは、イエズス会のインド地方区長巡察使アレックスサンドロ・ヴァリニャーノのことで、天正七（一五七九）年に渡来し、九州で大友宗麟（そごりん）や有馬晴信と面会した後、九年の春に本州へ渡って信長とも会っている。来日の目的は日本における布教状況の調査であつたが、信長の眼を引きつけた第一のものは、彼が連れていたこの黒人の従者であつた。名前はヤスケという。

年齢は二十六、七歳、全身は牛のように黒く、見事な体格で、力は十人を凌ぐと『信長公記』にある。

この世に黒い肌の人間がいるなどとは信じられなかつた信長は、彼の腕を洗わせ、色落ちしないのを確かめてから、ようやく信用したという。

いつ、どこで出会つたのか、光秀は覚えていなかつた。彼の記憶にあるのは、いま、大地の上から自分を見上げているのと同じ、吸いこまれるような黒瞳（くろどう）であつた。

「この者はどうなされますか？」

利三の声は、彼方で鳴る梵鐘のように虚ろに響いた。

「そやつは——獣と同じだ。何もわからぬ。解き放つがよい」

「では、他の者と等しく」

「いや」

光秀は自分の声を遠くきいた。

「他の者は……ならぬ。この場で討ち果たせ」

地上から悲鳴が噴き上がる。顔を上げ、眼を見開いて光秀を見つめる捕虜たちの表情は、絶望と死相に彩られていた。家臣団でさえ愕然と主人を眺めたのである。

「ですが、殿。——こ、やつは最後まで信忠のそばにあつて我らに槍をふるい、三人に手傷を負わせました。また、何やら胡乱な節もございます。この場でご成敗なされた方が、後々禍根を残しますまい」

「ならぬ。この黒坊頭のみ放逐し、他の者は斬れ」

利三は、また、

「ですが」

と膝行した。

「本来ならば、信長に仕えているはずの黒坊頭、それが今日に限って信忠のもとにおつたのは何故か、信長が死期近きを悟って解き放つたとも考えられますが、私には解せませぬ。何やら妖しき評判も聞き及んでおります。ここは——」

言いかけて、光秀の眼を凝視し、利三は心臓が氷の玉に変わったような気がした。

地獄とは、仏僧が説くような熱い場所ではない。それは、限りなく冷たい孤独な行き処だ。主人の眼がそう言っている。地獄を覗き込んでいる。

「利三——逆らうか？」

光秀がこちらを見た。舌足らずの、酔いどれのような声——これが、胆力のかわりに聡明さを備えたと謳われる主人の声だろうか。

「いや、御心のままに」

と平伏して応じたのは、絶望に向けてであった。

捕虜たちの死の絶叫が闇を裂く中、ひとつの影が京の朝の大路を小走りに走り去った。

事変を覗きに出た町家の住人のうち幾名かが、そいつの姿を目撃している。

灰色の布で頭から腰までを覆った黒坊頭。そして、誰もが口を揃えるのは——黄色い歯を剝いて笑っていた。それは、自らの運の良さに歓喜するなどといったレベルではなく、途方もなく巨大な——ひとつの世界に対する邪悪な呪いを込めた笑みなのであった。

2

「巨星墜つ」

杉の巨木が節操もなく夜明け近い空へと向かう深い森の一角で、こうつぶやいた影がある。丁度、京の町で、ひとりの不世出の武将が焼け落ちる寺と運命をともにするより二刻ほど前の時刻である。うす青い空には、まだ星があった。

「わしの星占いも、まだ健在とみえる。これでこの国の命運も大分、変わることにじゃろうて。——はて」

ここで、虚空へと向けた両眼を細めて、少し沈黙に入ったが、それきり何の音もせず、草を踏む足音だけが遠ざかっていった。

奇妙なものが後に残った。

「気」とか「念」とかいった存在を、五感以外の感覚で視認可能な人物なら、ほうと感心し、ついで青ざめたにちがいない。

尋常な世界に残されたのは無色透明の「気配」であった。

幻視者だけが、そこに人間の姿を見た。

白髪白髯——齡九十は下らぬ老人の姿を。皺と老人斑の蹂躪にまかせた肌は、しかし、異様に黒光り、周囲を圧する生氣に満ちている。若さにまかせた年齢の者たちと健脚ぶりを競っても、ひよっとしたら武器を取り、或いは素手で武芸の技を比べても、最後に勝ちを収めるのはこの老人であろう。

その表情が凍りついていた。

星の残る黎明の空から、別のものが——大魔王でも降臨するかのごとく、絶対の恐怖を刻みつけて。

奥月源齋は、村へ戻ると、真つ先に北の岩屋へ向かった。

黒々とそびえる円蓋状の岩屋の、これも数トンはありそうな厚く巨大な石扉の前には、三日前から終日、篝火がたかれ、二人の護衛役が長槍片手に立っている。

老人は人っ子ひとりいない村の路を通り抜けて彼らの前へ行き、

「どうじゃ？」

と訊いた。

二人が顔を見合わせるのを見て、老人の表情が固くなった。すでにどちらが伝えるか打ち合わせでもしてあったのか、同じ年頃と見える二人のうち、やや背の高い方が、

「実は——聞こえた」

と耳打ちした。